コロナ危機―研究者のつぶやき

2019 年 12 月中国武漢で発生した新型コロナウイルスによる 2019-新型コロナウイルス感染症（COVID-19)は、社会活動や経済活動に未曾有のダメージを与えている。国内では 2020 年 11 月現在感染者数は下げ止まりの状態である。これから経済活動の再開と感染防止の両立が課題であるが、経済活動の本格的な再開に伴い、感染者数は増加に転づる可能性があり、第 3 波の到来、感染の長期化が懸念されている。

COVID-19 発生来、ワクチンや治療薬の研究開発に、非常事態宣言下においてもひたすら走り続けてきた感がある。しかし、ふと社会の変化や人と人の関係性に目を向けた時に、気持ちがざわつくことがある。これまで人が集まり、移動して、グローバル化することによって、国際社会が形成され、経済が発展してきた。研究活動もそうであることに疑いはなかった。ところが、COVID-19 の発生でこれが根本から崩された。国内あるいは国を超えた移動は制限され、人と人の接触が制限された。疫学的観点から、移動や接触の制限がパンデミック対策として極めて重要であることは十分に理解している。しかし、ウイルス感染という一点においては、移動の自由はこんなにも簡単に崩れてしまい、人は他者にとって潜在的に脅威でしかなかったのかと呆然となった。そんな時、東ドイツ出身のドイツのメルケル首相が、ロックダウンを前にしたスピーチで、「渡航や移動の自由が苦難の末に勝ち取られた権利であるという経験をしてきた私のような人間にとり、絶対的な必要性がなければ正当化し得ないものなのです。民主主義においては、決して安易に決めてはならず、決めるのであればあくまでも一時的なものにとどめるべきです。しかし今は、命を救うためには避けられないことなのです。」と述べていたのを聞いた時、救われた気がした。

現在も、コロナ後も、人が会ったり、集まったりできない中、人と人が実空間で距離がある中で、人は心から共感することができるのだろうか。研究活動においても、サイエンスの潮流は、息づかいが伝わるような距離での熱いディスカッションを種にして生まれてきたと思う。この点においても研究者の挑戦が続き、これが新しいサイエンスの発展につながるかも知れない。また最近、新型コロナ研究を含め、色んなビッグデータを AI を含む情報解析ツールを駆使して解析することが多くなった。これから益々そのような実空間・デジタル空間融合型の研究が発展すると思われる。データは単なる数字の集まりではない。時に、そのデータの由来となる人や家族、その生きざまや死に、思いを寄せながら研究に臨みたいと思う。

（たきのみち ゆずる）